

“MOKOMOKO・BORDER” (モコモコ・ボーダー)

栗原 針山

今日、SNS や AI の発達によって世界規模で瞬時に人が繋がれるようになりボーダーレス化が加速度的に進んできた。便利で良いことではある。しかし人の心は果たしてそこに追いついているのだろうか。例えばデマやフェイクニュースに対し吟味することなく乗っかり、あっという間に拡散してしまうこともある。そしてそれが時には誰かを自殺に追い込んだり命を左右することも増えている。本来踏みとどまるべきボーダーまで失われつつあるのだ。

ボーダーというと国境をイメージする人も多いかと思うが、ここで取り上げたいのは特に個人の内面におけるボーダーである。だがそれは非常に複雑で繊細なものだ。マイナスに作用すれば人種差別などにもつながりかねない。だからこそ、今の時代に求められているのは短絡的な差別化としてのボーダーではなく、十分な葛藤の先にあるプラスの産物としてのボーダーではないだろうか。それは人間性の希薄化に歯止めをかけることにもなり、むしろ互いを表面的にではなく真に尊重しあえることにもつながるはずだ。

具体的に言えば、いったん立ち止まり相対する問題に葛藤を重ね、そのギリギリのボーダーに解決の糸口である煌めきを見出していくことだ。このアプローチを私は *MOKOMOKO・BORDER* (モコモコ・ボーダー) と称して書で表現している。葛藤の対立対象は自己の内面における二面性、個と全体性、あるいは生と死といった概念や普遍的なテーマにも及ぶ。“*MOKOMOKO*” (モコモコ) とは日本語で「次々と周囲より盛り上がった部分が生じるさま」を指す。1°C単位の温度調整や熟成などの独自の墨の作り方によって書する文字の一点一画をモコモコと滲ませ、そこに葛藤をはじめとした感情を投影する。文字そのものが元々もつ意味と相まって命が吹き込まれていく。そして線同士がモコモコとぶつかりせめぎ合った末、その狭間に実に微かな、だが確かなボーダーが生まれ光を醸し出すのだ。それは結果としての余白やボーダーにこそ価値が生まれることの象徴でもある。このモコモコとした墨は今まさに膨らみつつあるように見えるので、生々しい永続性をもつことができるようになる。

人間は元来、葛藤する生き物であり切実に出口を探そうとする。その過程がシビアであればあるほどそこに残るボーダーはより実体をもった生きる煌めきとなり、本質的な存在意義を取り戻すことになる。そう、私の提唱するボーダーとは、誰もが抱える葛藤や苦悩の先にやがて訪れる確固たる一筋の救いの光であり明日を切り拓くものなのだ。

コロナ禍において凶らずも閉ざされ足元を見つめ直すことの一端を感じる人も多かったかと思う。人間の真価がより問われるこれからの時代に向け、混沌とした葛藤の先のボーダーの光をいかに見出していくのか、観る人がそれぞれの人生を重ねながら感じてもらえたら幸いである。

2021年記 2024年改訂